

英語の対話文 Dictation における学習者の 誤りと Communication Strategies

A Study of Japanese ESL Learners' Errors and Communication Strategies When Dictating English Dialogues

(1990年4月9日受理)

塩 見 佳代子

Kayoko Shiomi

Key words: Error Analysis, Communication Strategies

1. 序 文

外国語（英語）学習において学習者が犯す誤りには様々な種類のものがある。誤答を単に学習者の語学不足と片付けてしまえばそれまでだが、一歩踏み込んで、誤答を導く原因を調べていくと、そこには目標とする言語と学習者の母国語との関係（母国語の干渉）だけでなく、英語自体のもつ複雑な構造、あるいは学習者が外国語（ここでは英語）を学ぶ過程で用いる Strategies が見えてくる。しかし、誤答の種類が多いのと同じ位、誤りの原因や学習者の用いる Strategies も多く、それらは互いに複雑に影響し合っている為、一方面だけ（例えばスペリングミスだけ）から誤りを分析しても、つづりや文法知識以外に外国語学習に伴う学習者の音声面での誤りは理解できない。従って本研究では、英語の Receptive Skills と Productive Skills 習得における学習者の誤りと Strategies を共に把握する為、英語の対話文を聞いて書き取るという Dictation 作業を通して、日本人英語学習者が犯す誤りを、綴りや統語面だけでなく、音声面あるいは意味面からも分析していく。

2. Contrastive Analysis (CA) と Error Analysis (EA) の背景

Contrastive Analysis (対比分析) は、外国語学習における困難や誤りの主な原因は母国語からの干渉であるという仮説に立っている。そして母国語と学習の target とする外国語の 2 言語間の差異が学習困難を起し、相違点が大きければ大きい程学習困難度も増す為、Lee (1968) の説明によると CA の結果は学習の困難な点や誤りを予測するのに必要であり、学習者が学ぶべきものは CA によって明らかになった相違点の総計であり、何を教えるべきかは 2 言語を比較し、それらに共通なものを差し引くことによって見出すことが出来ると述べている。それに対して Corder (1978), Richards (1974), Tarone (1983) などは Contrastive Analysis の不十分さを訴え Error Analysis の重要性を説く。これらの学者は、学習者の言語に認められる母語と目標言語との間には中間的段階を示す中間言語 (Inter-language) があり、これはある外国語を学習中の者が用いる不完全な外国語と言えるが、この言語の背景を分析することが、誤りの分析へ通じることになると主張している。又、彼らは、外国語学習者が学習過程において犯す誤りの主な要因は、母国語を習得していることからくる学習妨害 (Interference 母国語の干渉) もあるが、それだけではなく、目的とする外国語の内に存在する、いろいろな項目の相互

の学習妨害から生まれてくる誤りがかなり多くあると指摘する。そしてその様な誤りは、母国語と外国語の対象分析 (Contrastive Analysis) では説明することが出来ないと述べている。

Richards は母国語から来る誤り以外の誤りを、言語内誤り (Intralingual Errors) と発展的誤り (Developmental Errors) との2つに分類している。

(1) 言語内誤り—言語の規則に関する一般的特性から来る誤り。

例えば、'we are hope' 'it is occurs' などの様に、目標とする外国語で他の構造を学んだ経験をもとにして、言語の規則から逸脱した構造を自分で作り上げること、つまり、過大一般法則化 (Over-Generalization) することにより誤りを犯すものが多くある。他に 'We talked about it.' から 'We discussed about it.' や 'He said to me....' から 'He asked to me....' などの様な誤りが起こるのは、両者の類似 (Analogy) が原因となり、それぞれの持つ規則制限を無視することから生ずる。又、'How long does it take?' に対して 'It take...' としたり、'What does she have to do?' に対して、'she have to do...' などとするのは、規則の不完全な適応から導かれているものとみなされる。

(2) 発展的誤り—目的とする言語における差を間違えて理解していることから生ずる誤り。

例えば、Was を過去時制の標識として理解する為に生ずる 'It was happened.' や is を現在時制の標識として理解する為に生ずる 'She is speaks Spanish' などの様な類の誤りを言う。

Oller (1980) はこうした広い意味での学習者による誤りの分析は、外国語のテスト作成のみならず、外国語教授と学習の研究に多に貢献すると、Error Analysis の重要性を提唱している。

3. 目 的

英語の口語対話に基づく Dialogue を中心とした題材を用いて、Dictation 練習やテストを行ない、その結果現われる誤りをスペリング・語い、文法・統語面、音声面、意味面から分析 (Error Analysis) し、Dictation における困難な点、及びそれに対して日本人 ESL 学習者の用いる Communication Strategies を追求していく。

4. 対象と題材

今回の研究では、英語英文科2年生で英文書き取りを履修した学生70名を対象に Dictation テストを用いてその誤り分析を行なった。この70名は1年生の前期、そして2年生の後期と、合わせて1年間、英文書き取りのクラスを受講した者で、毎回様々な題材を用いて書き取り練習を行なった。主な教材としては物語、スピーチ、会話、イディオムを中心とした口語表現、対話、会話文、さらに歌や映画及びテレビドラマのセリフなどを扱った。授業ではカセットテープやビデオを利用し、毎時間小テストを行なった。平常行なう小テストは各学習者の問題点を指摘する為にも即座に学生同士、交換して互いに誤りをチェックし合うようにした。Dictation の中には一語から数語を補う部分的穴埋めや文全体を書き取る問題、又、二者からなる対話文の中の一者の発話文をそのまま書き取る問題を中心に練習を行なった。学習者の Dictation 能力の評価としては平常の小テストの他に、定期テスト (中間テストと期末テスト) を行なった。定期テストは主教材のテキスト及び補助教材の Audio-Visual Materials を用いて、様々な形態の Dictation テストを行なった。

5. 方 法

本研究では、期末テストの一部としてテキスト「Dictation With Idioms In Action」の未履修部分から20ペアのイディオムを中心とした対話文(表1)を選び Dictation テストを行なった。実際に学習者が書き取りをするのはペアの対話文の前者か後者のどちらか一方の文で、書き取りを行わない方の文はあらかじめテスト用紙に書き出されており、それぞれの Dialogue は全て自然な速度で3回話された。一度目はA, B両者の文が共に読まれ、二度目と三度目はAかBのどちらか一方の Dictation を行なう文だけが繰り返し読まれ、その後ポーズが置かれ書く時間が与えられた。学生は一度目はテープで対話文両文を聞き全体の流れを掴み、二度目で前者か後者どちらかの文を書き取り、三度でもういちどチェックし確認を行なった。アドバイスとして、Dictation しない方の文は回答用紙にあらかじめ書き出されている為、聞き取りが困難な場合は既に書き出されている文から、会話の内容を把握するように助言した。また、どうしても聞き取れない場合を除いて空白の部分を残さない様にし、単語の綴りが分からない場合も、出来るだけ聞こえた通りの音をそのまま工夫して表記するよう指示した。Dictation 結果については授業中の小テストと異なり、生徒同士のチェックではなく全て回収して採点した。そして、本研究では、二話者の発話する Dialogue の書き取りに於ける学習者の Errors と Strategies をより深く理解する為に、誤りは1) スペアリングのミスだけでなく2) 文法・統語面3) 音声面、そして4) 語いの誤った意味解釈を中心に、様々な角度から分析を行なっていく。

6. 分析結果

まず Dictation に使用された全20文(全215語)を13品詞毎に内容語(119語)と機能語(96語)の二つのグループに分類し、それぞれの品詞及びグループ毎に正答しなかった語(実際の誤答と学習者が答えを書かなかった語の両方を含む)の誤り率を見ていく。

図1に示される通り、誤答の最も多かった品詞は接続詞(59%)で、次に数詞(56%), 冠詞(54%), 前置詞, 動詞, 助動詞, 形容詞, 副詞, そして代名詞, 名詞, 指示詞, 人称代名詞, 疑問詞の順に誤答

品詞	(内容語 119語)						/	(機能語 96語)					
	名	数	指示	動	形容	副		疑問/代名	人代名	助動	冠	前置	接続
語数	36	2	3	47	15	11	5/ 7	31	10	11	27	10	
人数	70	70	70	70	70	70	70/ 70	70	70	70	70	70	70
総数	2520	140	210	3290	1050	770	350/490	2170	700	770	1890	700	
誤り数	868	79	72	1359	403	296	88/176	697	271	412	886	416	
誤り率	34.4	56.4	34.3	41.3	38.4	38.4	25.1/35.9	32.1	38.7	53.5	46.8	59.4	
実際の誤り	502	50	37	653	214	154	63/ 41	224	147	37	156	82	
誤り率	19.9	35.7	17.6	19.8	20.4	20	18/8.4	10.3	21	4.8	8.3	11.7	
回避数	366	29	35	706	189	142	25/135	473	124	375	730	334	
誤り率	14.5	20.7	16.7	21.5	18	18.4	7.1/27.5	21.8	17.7	48.7	38.5	47.7	

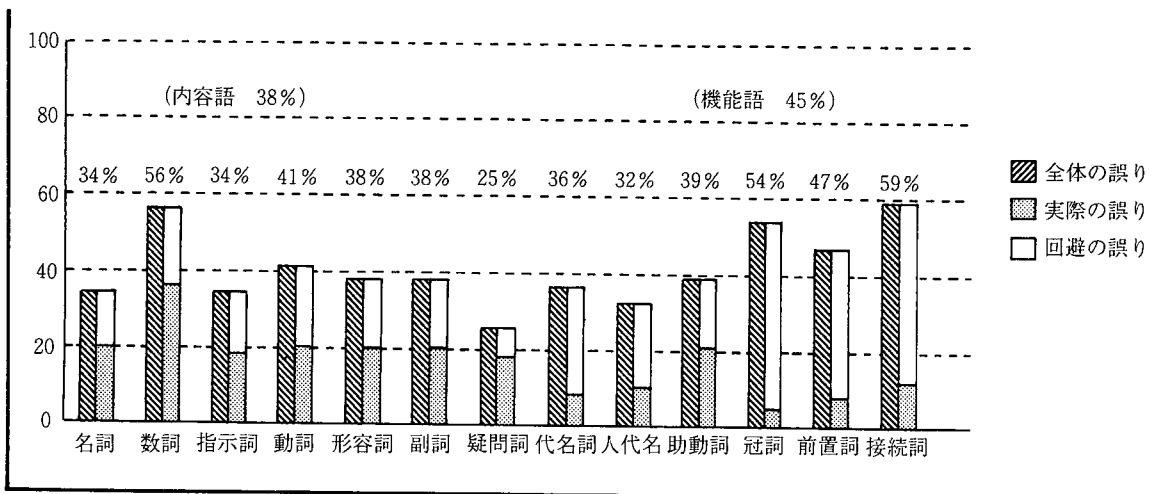


図1 品詞別に見られる誤り率・実際の誤り率・回避 (Avoidance) 率

率が減っていく。誤答の中には学習者が聞き取れなかったり、聞き取れたが書き取れなかった語、つまり学習者が回避 (Avoidance) した語、あるいは、聞き取り書き取った結果が誤答になった実際の誤りがある。従って、誤答を Avoidance の為の誤りと実際の誤りに分け、両者を別々にみていくことにする。図1から、ほとんどの品詞において Avoidance による誤りの多かった品詞は、実際に誤りの多かった品詞と比例しているが、一方、反対に、Avoidance は多いが実際の誤りの少ないものには代名詞、冠詞、前置詞、接続詞がある。全体の誤り率、及び Avoidance (回避率) と実際の誤り率を内容語、機能語別にみていくと次のようになる。実際の誤り率は、機能語よりも内容語において多くみられるが、学習者が解答を行なわなかった、言わば Avoidance 回避率は内容語よりも機能語に多くみられた。

	全体の誤り率	実際の誤り率	Avoidance (回避率)
内用語	38%	22%	17%
機能語	45%	11%	34%

理由として機能語は普通アクセントがおかれて読まれない為に、音の消失や同化、弱音化が行なわれ学習者が音をはっきり聞きとれないことからおこる誤りが多いと考えられる。

一方、内容語に関しては機能語よりも1語における文字数が多く、言葉自体聞き取れても、実際にその単語を正しく書き取れない為におこる誤りが多いと考えられる。

これは次の図2に示されたスペリングミスの分析からも裏付けられる。

1) スペリングミス

ここでは回避による誤り以外で、実際に表面上に表われた誤りの内、学習者が音は聞き取れているが、聞き取った語のつづりが分からないことから起こるスペリングミスを品詞別に見ていく。

図2から内用語と機能語を比べた場合、内用語に関するスペリングミスは学習者の実際の誤答の中で19%をしめるが、一方、機能語に関するスペリングミスは1%にしかすぎない。従って学習者の Dictation において犯す誤りの多くは、特に内用語の綴りを十分完全に習得していないことが一因となっていることが判明した。と同時に、スペリングミスの31%は同音意義語に対しての不適切な対応に

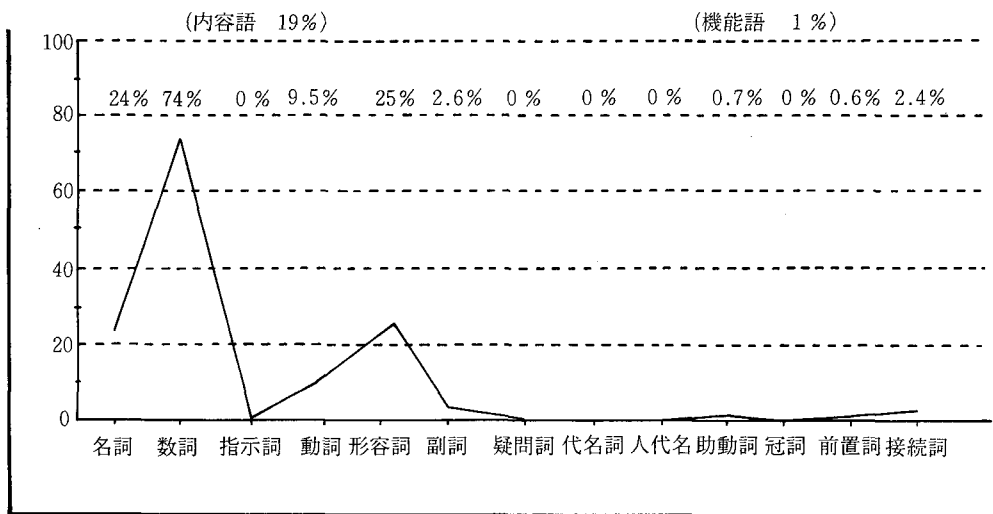


図2 品詞別に見られるスペリングの誤り率

よるもので、例えば、今回数字に関するスペリングを誤った37名全員が、two を to と書いており、逆に前置詞の to を two と書いている者も数名いた。

以上のことから、スペリングミスには(1)音が完全に聞き取れていない為に起こるもの、(2)音は聞き取れているがスペリングが十分に分からない為に起こるもの、又、(3)音も聞き取れ語の綴りについても知識はあるが、同音意義語など語自体や文全体の意味を的確に把握していない為に起こるもの、更に(4)品詞の使い方や文型など文法、統語面に関する知識不足の為に起こるもの。と大きく別けて4つの原因があるように思われる。

2) 文法・統語面の誤り

文法に関する実際の誤りを分析する際、学習者が英語の基本となる文型を理解し、適切な品詞を選んでいるかどうかには焦点をあて、各品詞毎にその誤りを分類していく。結果は下の図3に見られる通りで最も誤った使い方の多い品詞は数詞で、次に、接続詞、冠詞、疑問詞、動詞、続いて、名詞、助動詞、副詞、形容詞、指示詞、そして人称代名詞、前置詞、代名詞の順である。

各品詞の誤りを内用語（誤り率59%）と機能語（誤り率51%）別に見ると、内用語に於ける品詞の使い方により多くの誤りがあることが分かる。次に顕著な誤りを具体的に観察していくと、まず、名詞については固有名詞に関する誤りが多く second, orange, streets など音は聞き取れているが、語頭を小文字で書いている場合が目立つ。これは、固有名詞についての文法知識が不十分であること、あるいは、これらの語が固有名詞と認識出来なかったことから起きた誤りと言える。又、名詞の複数形に関する誤りが多く、語尾の -s 省略は、単数形や複数形についての文法知識が不足しているだけでなく、語尾の音がはっきり聞き取れないという、音声面の問題が絡んでいる様に思われる。音声についての誤りは次の音声面の項目で詳しく調べていく。

数詞に関しては、スペリングミスの項目で述べた通り、同音異義語の為に数詞の two を前置詞の to と書いた誤りが目立ったが、この場合も、動詞 saw の後に来る品詞をはっきり理解してない証拠で、

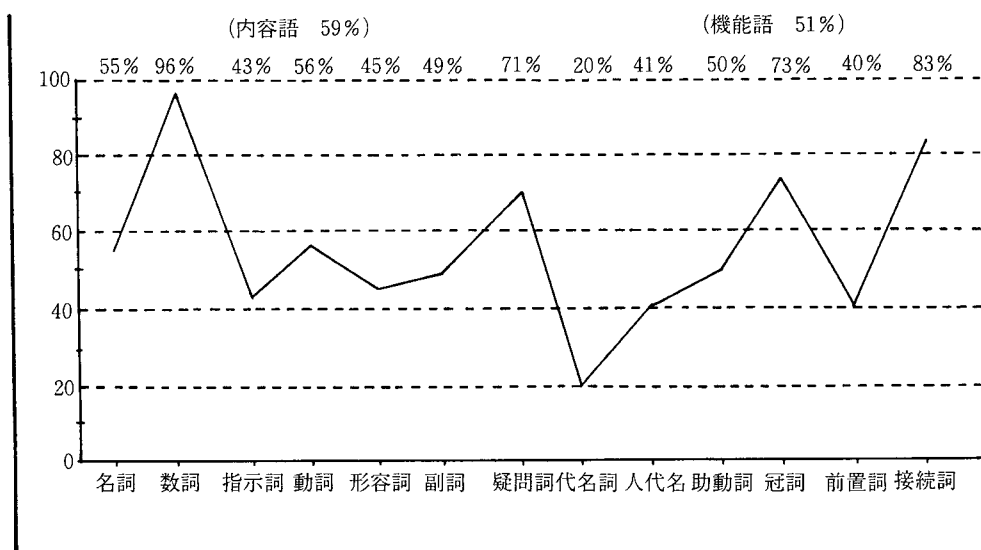


図3 品詞別に見られる文法の誤り率

英語の文型及び統後面に關しての知識不足を表わす。次に、動詞については時制に關する誤りが多く、過去形 (-ed)・過去分詞 (-en) を現在形のまま書いたもの、あるいは、3 人称単数形の主語と動詞の一致に必要な -s を省略したものなどが多く、学習者は不十分な文法知識に対して簡素化 (Simplification) という Strategy を用いたものと考えられる。又、動詞では現在形 (eg. think) と現在進行形 (eg. thinking) の誤りも多く見られるが、これは時制の誤りと同時に、語尾が完全に聞き取れない Listening 上の問題と、They think 「考える・思う」を they thinking 「考えている・思っている」と日本語的発想で文の意味を解釈することから起こる母国語の干渉 (Interference) による誤りと言えよう。この様な日本語と英語構造の差異に基づく誤りには他に、定冠詞 (a/an) と不定冠詞 (the) の不適切な使い方による誤りもある。しかし、音声面からみると the /ðə/ と a /ə/ はどちらもあいまい母音が使われており、両冠詞の誤りも Dictation においては、単に文法上の問題だけでなく、音の弱化に見られる音声面の特徴と、学習者の Listening 能力との問題とも深く関わっているように思われる。他に音声面とも深く関係のある誤りに、語と語が結びつけられ短縮したものに対する誤りがある。語尾の子音の弱音化に伴い、It's, That's, I'm, They're, の be 動詞を聞き落として It, That, I, They としたり、mother's, You'll, It'll の助動詞を省略をして mother, You, It とする誤りが多く見られた。しかしこの様な不完全な聞き取りによる誤りも、主語と動詞、主語と助動詞、あるいは時制の知識が十分に備わっていると防ぐことの出来るものと言えよう。

形容詞と副詞の誤りの中には 1 語の単語 incorrect, downtown を 2 語の in correct, down town としたもの以外に多くあったが、これは音は聞き取れているが単語そのものについての十分な知識がないことを示す。又、比較級の easier を easir, あるいは easyier とする綴りの誤りだけでなく、easy, easily とする誤りがあり、これは学習者の比較級についての知識があいまいであることを示す。

その他、語頭にくる疑問代名詞の誤りとして What were...? の代わりに What's...? としたものがあるが、これは文末にある yesterday という過去の時を表わす語を確認していないことの他に、What's this/that?, What's...? という疑問詞 what を用いる疑問文の基本型から、学習者が what 疑問文に対して

過大一般法則化 (Over-Generalization) を行なった為の誤りと考えられる。もう一つの Over-Generalization による誤りは, She seems so sad since.....の so...since の代わりに so...that を用いた文に見られる。これは, 「あまりに....なので....だ。」という意味に使用される so that 構文を学習した後, so の後形容詞や副詞があると必ず次にthatが続いて来ると思い込み, Over-Generalization をした為に起こした誤りと言えよう。学習者は副詞 so と接続詞 since の使い方, 及び主節と従属節の関係について, もう一度まとめてみる必要がある。(品詞の誤りの具体的数値は表 2 を参照)

表 2 Dictationにおける文法 (品詞の使い方) の誤り

誤り	品詞	名詞	名固	数詞	指示	動詞	be	動名	動分	形容	副詞	no	疑問	代名	人代	人所	助動	定冠	不冠	前置	接続
名詞		2	86			9	1	33	4	8	1		1		2	1	1	1		4	
固有名詞																					
数詞		1								10										1	
指示詞		1					1			3	1							3		3	
一般動詞		8					6	8	11	28	5			1	2	2	39	2		3	2
be動詞				2	3	2	2							5	11		6	3	1	4	2
動名詞						22			3	1							1				
過去分子		1				4		1			4						1			1	
形容詞		8				10	2	1	1	26						9		1		11	21
副詞		2				8		1		2	34			1	3	3	2			3	1
副詞 not						3			1				1								
疑問詞							10				2					5	7			1	5
代名詞		7		6	7		1			4						1	2			9	
人称代名詞		10				2	1				11		29		2		1			2	
代名詞所有格		1			1		6			2					4						
助動詞		2				31					1		3		1						
定冠詞				1	4					2	1					15			2		2
不定冠詞		1		1				1		2	1			1	4	10		9		2	1
前置詞		7		38	1		70			8	14		1		2	5	4	4		2	33
接続詞						1	1									4		1		16	
感嘆詞			23										4								1
s なし		62	49			20															
余分な s		2				11		1	2				6								
ed なし						44			12												
余分な ed		1				3															
余分な助動詞															6						
to 不定詞						9															
not なし												9									
余分な not												2									

3) 音声面の誤り

次に、音声上での誤りを母音と子音別にみていく。(表3、表4参照)

表3 Dictation における母音の誤り

母音 誤り	æ	e	i	a/ɔ	ʌ	u	ə	ər	ɜ:r	aər	ɔər	a/æ:	i:	ju:	ɔ:	u:	ai	ei	ou	au	ɛər	iər	juər	auər
æ		16	3		1		3		1	1							1				4			
e	1		38							1	2	13	1			1	4	9	1	1	14			
i	4	6		1			45	2	2				6				4	17	6	3	2	11	1	
a/ɔ	1	9	7		12	1	11	1		2	21		1		1	1	16	4	46	1				
ʌ	7	11	2	1			3		2						1			5		2	1			1
u			1													2	1	1						
ə	19	12	30		2	1		1	10	7	2		1	1	2		10	34		17	15		2	3
ər	1	8	1				1			1							1					1		
ɜ:r	1																			1				
aər	1	9				1	1		4								1				3		3	
ɔər		1	6			1	1			3					1		6		3					
a/æ:		3												2										
i:	1	3	3	1			5		1			7	13					1	2		26			
ju:										1							13							
ɔ:							2				21								10		1			
u:			1	5					13		1						1			1				
ai	9	1	1		1	1	6		2	1	1	4	2	1						22	1			
əi													1											
ei	9	17	1	1					1				2	1			1		2		2			
ou		2	1	5			3			2	4		1		14	1	1	1		1				1
au	1		2	1	1		13		6	1				1			1			1				
ɛər				2			1						1											1
iər			6				1			1											1			
aiər																								1
juər							3		1					37			1		2					
uər																								
auər																								
誤り 総数	55	98	103	17	17	5	99	4	43	21	52	24	28	44	19	5	62	70	72	50	70	12	6	7

表4 Dictationにおける子音の誤り

読み	子音	p	b	t	d	k	g	f	v	θ	ð	s	z	ʃ	h	m	n	l	r	d	w	y	ts	hw	ks	
	p		1			1		2	2							4		1		1		1				
	b	1							7		2							1	2		1	1		4		
	t	4		15	4	8	1		6		2	8	5		2	3	10	9	1	1		1	80			
	d			25	2	2	1		8				11			1	1	15	12	1	4					
	k	1		1	1	12		1	1	1						1	2		1	3	1					
	g			1		2	z1										1	1		3						
	f	47	1						4			1			10						43			3		
	v			1				12					2		1	1	1	2	2							
	θ											35									1					
	ð			5				1	1	2		7	19	1	2	1	1	1				4	1			
	s			8			1	9		1		2	4	4	2		1		2				1			
	z			7				1					11				3		2				7			
	ʃ											1			1											
	ʒ																									
	h		1		1				1		1	1				1	30		1		3			2		
	m		1	2							2		1		2		1	1	12		1			3		
	n	1		14	1			3	7							34		5	8			3				
	ŋ					n5														2						
	l		1	16	1		1		5								3	y3	50				1			
	r			13	2			2	1								4	36			1					
	t			9													1									
	d				1																					
	w		24	3	1										1		1		2					37		
	y		1	1							2				2	2			4	1	12					
	ts			12		1												2								
	hw					1					1				2						11					
	ks																									
語頭		2	30	6	9	1	2	9		4	10	44		5	25	6	2	6	21		78	11		49		
語中		51		4	2	8		18	19			2	9			2	5	15	10	10						
語尾		1		12	3	23	3	4	24			9	44			40	54	56	68	2			90		1	
頭無		2		13	24		1				21				4	3		1								
中無		3		1	9	5	3	1				2				2	55	3		2						
尾無				41	14	14	7		4			1	19			14	26	32	46	3			2		13	
総数		59	30	18	61	51	16	32	47	4	31	58	17	5	29	5	7	14	11	14	17	78	11	92	49	14

a) まず、母音の中で最も顕著に現われたものとして、/æ//e//i//ə//ai//ei//au//ər/の各母音を、あいまい母音の/ə/として聞き捕えたことによる誤りが多くあった。代表的な例は、文法面からの分析で前に述べた定冠詞と不定冠詞の混同を含め、アクセントのない母音の弱化に伴って、人称代名詞の they / ei / や所有格の their / ɛər / を the / ə / としたり、指示詞の that / æ / や this / i / を the / ə / とする誤りが多く見られた。又、語数が少なく1音節からなる前置詞や接続詞の誤り、例えば、and / ʌnd / を in / in /, on / ɔn / としたり in / in / を on / ɔn /, and / ʌnd / とする誤りも意外に多かった。これらの誤りは文法面だけの難しさを考慮に入れると、頻繁に起こらない誤りの様に思われるが、アクセントのかからない母音の弱音化現象から分析すると、誤りの原因がより理解出来る。同じ様な例として、被験者の半数近くが間違った助動詞 won't / ou / と動詞 want / a / ɔ / の混同がある。これも助動詞と動詞の不十分な文法知識として片付けるのではなく、視点を変えて、音声面から分析すると学習者の strategies がよりの確に説明できる。つまり、この2語 won't と want は子音 / w /, / nt / は同じで母音だけが / ou / と / a / ɔ / に異なる minimal pair であり、1音以外他の音は同じという音の類似から起こった誤りと言えよう。今回の Dictation で、母音の異なる minimal pair による誤りと思われるものには次の様なものがある。

正答 selling so Then men well plan park pool

誤答 sailing saw Than man/main will plane pork pull

[70人中/	46人	45人	38人	34人	30人	26人	22人	21人	21人	19人	17人	17人	17人	16人]
誤り率	65%	64%	54%	49%	43%	37%	31%	30%	30%	27%	24%	24%	24%	23%

正答	ou	ə	i	ei	i	ɛər	au	ɔər	ɔər	æ	ei	e	au	e
誤答	a/ɔ	i	e	ə	ə	i:	ai	a/ɔ	ɔ:	ə	e	ei	ə	æ

[70人中/	16人	15人	14人	14人	13人	13人	13人	13人	13人	12人	12人	11人	11人	11人]
誤り率	23%	21%	20%	20%	19%	19%	19%	19%	19%	17%	17%	16%	16%	16%

正答	ai	ɛər	ɛər	ɔ:	ə:r	i:	a:/æ	ai	ə	e	ʌ	e	ə	iər
誤答	a/ɔ	ə	e	ou	u:	ju:	e	ju:	au	ə	a/ɔ	ʌ	a/ɔ	i

更に、個々の母音において誤りの多いペアを並べると以下の順になった。

b) 次に、子音の誤りを語中における子音の位置別に見ていくと、(Avoidance と実際の誤りを含む) 子音の誤り総数1501音の中で、子音の語尾における誤りは871音 (58%)、語頭における誤り389音 (26%)、語中における誤り241音 (16%) となり、子音に関しては語尾における誤りが最も多く、ついで語頭における誤り、そして語中における誤りの順になっている。実際に誤った子音の数 (1020音) も子音の誤り総数と同様に語尾に一番多くみられ (545音/53.4%) ついで語頭 (320音/31.4%)、そして語中 (155音/15.2%) の順に少なくなっている。一方、それに対して子音の回避数をみると、実際の子音の誤りと同じく、語尾において最も Avoidance (326音/67.8%) が多くみられるが、おもしろいことに語頭 (69音/14.3%) と語中 (86音/17.9%) では、語中において回避がより多く行なわれていることが分かる。

子音の誤りを具体的に見ると、多くの場合母音と同じ様に、他の音は同じで子音一音のみが異なる minimal pair による誤りが多いことが分かる。例としては次の様な誤りが見られた。

正答 has whole park term set found take Bill

誤答 have/had home/hope part turn said sound make Fill/Will

もう一つの誤りの特徴として、音の消失 (Elision) や弱化 (Reduction) により、はっきり聞き取れなかった者を、学習者は類似した音で自分のよく知っている語 (Familiar Words) に置き換えて書くという Approximation に依存した Strategy をとっている、次の様な例の誤りが観察された。

正答 mothers couple written seems department relax her

誤答 others/matter cup letter same apartment me likes how

正答 sick careful stadium fly Los Angeles her

誤答 six care for stage, study flight Los and Jares how

正答 Betty data revised great

誤答 better day, late, Doller divided device grade

又、日本語の音ではなく日本人には難しいとされる英語独特の破裂音、摩擦音、舌卷音、舌側音などの誤り、特に /v/ と /b/ 音、/h/ と /f/ 音、/r/ と /l/ 音の区別がつかず両音を混同した為に起きた誤りに次の様なものがある。

正答 incorrect relax revised whole you'll

誤答 incollect lerux rebuys/rebaised fall your

正答 careful plan fly written think

誤答 care for pran fry letter sick

最後に子音の中でどの語とどの語を混同して聞き間違えているか、又、どの語が聞き取りにくいかを学習者の各子音に対する誤りと Avoidance の数を基に調べると以下ようになる。

誤りの頻繁に起こった音

語頭 正答 w hw s b w r w h

誤答 f w θ w y l hw f

語中 正答 p l f z v p v

誤答 f r v d l t f

語尾 正答 ts m r t l z n t t l r t k

誤答 t n l d r ð nt/nd/ns l n ld m ts ks/kd/king

Avoidance の多くみられた音

語頭 d ð t n m p

語中 n d k g p l

語尾 z t l r n d k ks

更に、母音、子音にかかわらず、語と語、音と音の連結（Liaison）によって起こる様々な現象—音の短縮（Contraction）や音の消失（Deletion）、あるいは音の融合（Assimilation）などオリジナル音の変化に影響を受けた次の様な誤りが観察された。

正答 left her think it's won't you in your use your

誤答 loved her/laughter thinks/thinking watch near usually

正答 set this It'll relax and sick so you'll you aren't broken into

誤答 sentise Little relaxer six/thiks your/you're your broking

正答 happen to it is was incorrect found out all the What were

誤答 happened/haven't this with in/within funded old What're

4) 意味上の誤り

最後に、文法面から見ても音声面から見ても原因がつかめにくい誤りを意味の上から調べてみる。すると、表面上は的の外れた解答とうつるものも、実際には学習者がそれぞれの語や文全体を聞いて各自、自分なりに意味を解釈したり、関連のある語を連想して（Assosiation）して選んだものであることが分かる。例として次の様なものがある。

- | | |
|--|--------------------|
| - She seems so sad since her boyfriend <u>left</u> her. | 誤答
loved / lost |
| 「別れた／去った／残していった」 | 「(かつて) 愛した／失った」 |
| - Bill, <u>won't</u> you <u>take</u> me downtown in <u>your</u> <u>car</u> ? | Well 「ねえ」 |
| 「ビル、あなたの車で町に連れて行ってくれない」 | want 「一してほしい」 |
| | drive 「運転して」 |
| | new 「新車で」 |
| - <u>Then</u> , could I use your car for a couple of <u>hours</u> ? | When 「いつ」 |
| 「では／じゃ」 「(2,3) 時間」 | days 「(2,3) 日」 |
| - What about in <u>that</u> corner? | next 「(角の) 隣／側に」 |
| 「あの角に／あのコーナーに」 | back 「(角の) 後ろに」 |

- this 「この (角)」
 report 「レポートの (書き直しが必要)」
- ... it's not well written and needs to be revised.
 「書き直しが必要」
- hospital 「(病気) で病院」
 help 「(家事を) 手伝う」
- ... been sick so she has to do the housekeeping.
 「家事をしなければならない。」
- all 「全ての (計画)」
- ..., you'll mess up the whole plan. 「計画の全て」
- money 「お金は (どこ)」
 seen/got 「(それ) 見た? / 手に入れた?」
- Do you happen to know where it is?
 「それがどこにあるか知ってますか」
- thought 「思った」
 maybe 「多分 (本当だろう)」
- I saw two men fly down on the Olympic stadium...
 「二人の男がオリンピックスタジアムに飛んで降りるのを見た」
- offer 「アイデア (を提供する)」
 your/their 「貴社/彼等の会社」
 this/seven 「今朝 7時」
- I have a great idea for coming to the office every morning.
 「いいアイデアがある」「会社/事務所」「毎朝」
- I'm afraid the data I typed on my term paper was incorrect.
 「データ/資料」「タイプした」「期末のレポート」
- day/detail 「曜日/詳細」
 title/typewriter 「タイトルをタイプでうつ」
 time 「期末のレポートの期限/時」
 writer 「レポートを書く人/者」

5) 今まで見てきたDictation における様々の誤りをまとめて測定すると次の様になる。

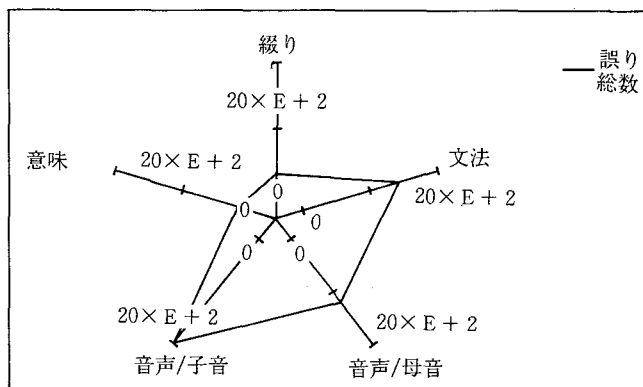


図4 綴り、文法、音声（子音・母音別）、意味別に見た語の誤り比較

上記の図から、一概に誤りと言ってもいろいろな誤りがあり、その原因も様々で、複数の要素が互いに影響し合っていることが明らかで、一見して綴りの誤りと見られるものも、学習者の文法知識のみだけでなく、意味の解釈の仕方、そして特に、音声面での問題が大きく関わっていることが分かる。

7. 結 論

Dictation 結果は応々にして表面上に表われた誤り、特に綴りに関する誤りを中心に引き上げられ、その誤りの大きさや頻度により、学習者の文法知識の不十分さを指摘する傾向がある。しかし、学習者の犯す誤りを単に文法や語い不足と決め付けるだけではなく、どこに問題があるのかを追求しその原因を解明する為、いろんな角度から誤りを分析し、学習者がどのような Strategies を用いているかを評価することが重要である。従って、今回 Dictation に見られる Errors をスペリング、文法、統語面からだけでなく、音韻面や学習者の解釈したと思われる語の意味の側面からも分析をおこなった。その結果、スペリングの誤りを見ただけでは、どうしてこのような誤りが起こるのであるかと思われたもの、又学習者の文法の力不足が強調されたかに見られる誤りも、実は日本人学習者が英語の聞き取りで直面する音声上の困難さが影響していたり、各語の持つ意味を自分なりに解釈し、文の内容からあてはまる語を創造力豊かに連想して引き出した結果現われた誤りとして理解することが出来、様々な誤りの原因がより的確に説明出来るようになった。と同時に、Dictation において学習者も自分自身の所有している英語の文法、音声、語いに関しての全知識を結集し、様々な Strategies を用いて Dictation 練習およびテストに対処していることが分かった。

考察と今後の課題

今回の Dictation の Error 分析では、誤りを綴りや文法面からだけでなく、意味の解釈の仕方や英語の母音や子音を中心とした音声的特徴、及び、語と語の短縮や連結による音の脱落、同化、弱化や消失などが学習者の Listening に与える影響を研究した。しかし、Dictation から学習者の Communication Strategies をより深く理解し、外国語（英語）における学習者の総合能力を測定し、評価する為には、個々の音だけではなく、語及び文全体にかかる強勢、ピッチ、イントネーションなどの特徴 Suprasegmental Features を含めて研究を行なう必要がある。更に、本研究では、題材を対話文にしばったが、様々な種類の題材における Error 分析を行ない比較するとより広く学習者の Strategies が把握されるであろう。又、複雑な誤りの原因解明を補助する方法として、学習者自身に誤りを分析させ、どうしてその様な誤りを起こしたかを調査する方法があり、それによって種々の誤りの原因をより正確に追求することができると思われる。最後に、今回 Error Analysis の結果明らかにされた様々な誤りの原因と学習者の Strategies を理解した上で、学習の目的と学習者の Needs に応じて、適切な指導方法を考え実践していくことが今後の課題である。

参考文献

- Kanda, Hiroshi and Glenn T. Gainer. Dictation With Idioms In Action. 東京：鶴見書店, 1987.
 Corder, S. P. "Error Analysis, Interlanguage and Second Language Acquisition." in Valerie Kinsella (ed.) . Language Teaching and Linguistics: Surveys. Cambridge, 1978

- Lee, W. R. "Thoughts on Contrastive Linguistics in the Context of Language Teaching." in J. E. Alatis (ed.) *Contrastive Linguistics and Its Pedagogical Implications*. Georgetown University Press, 1968.
- Oller, Jr. J. W. *Research in Language Testing*. Newbury House, 1980.
- Richards, J. C. *Error Analysis: Perspectives On Second Language Acquisition*, Longman, 1974.
- Tarone, Elaine, A. Cohen and G. Dumas. "A Close Look at Some Interlanguage Terminology: A Framework for *Communication Strategies*." in Faerch, Clause

資料

表1 Dictationに用いた対話文 (全20ペアの文)

■ 綴り ■ 音声
■ 文法 □ 意味

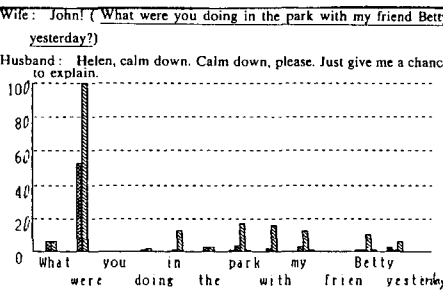
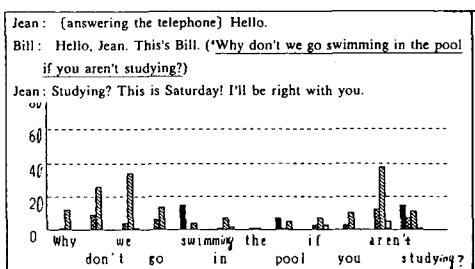
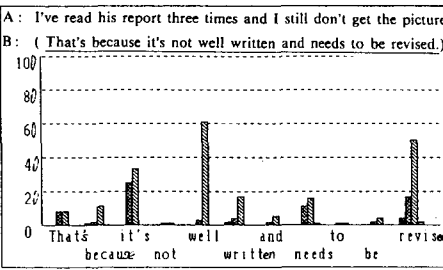
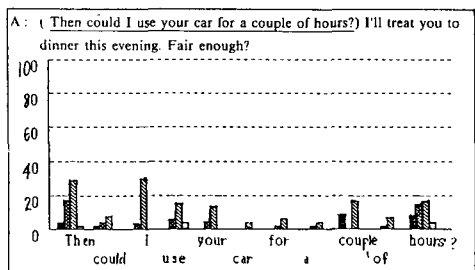
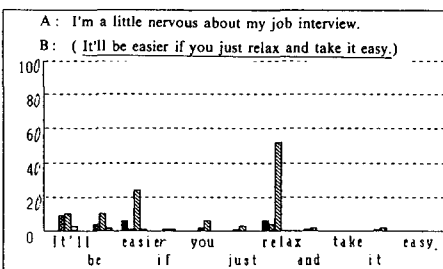
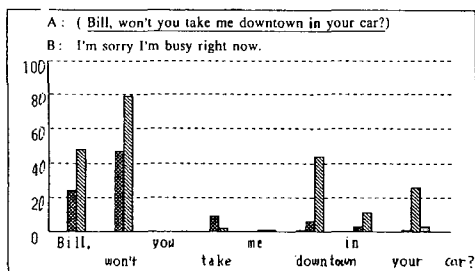
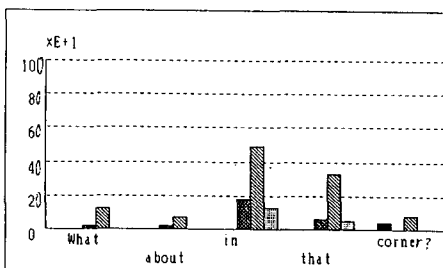
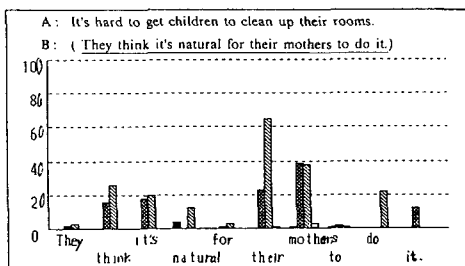
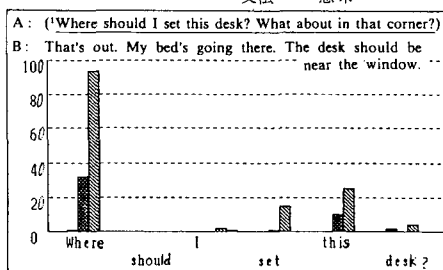
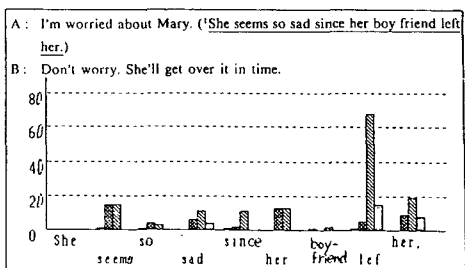


表1 Dictationに用いた対話文 (全20ペアの文)

■綴り □音声
■文法 □意味

